



寝ぼけ眼で小学校の学生服を着た私を、母が連れていった先が夜の海だった。

一昨年、母は静かに逝った。通夜の席で兄に代わって私がいさつをする事になった。「……写真や記憶のなかの若いままの父と、老いた自分をくらべて、晩年の母はよくいっておりました。あの世に行った時、お父ちゃんは自分を見つけてくれるだろうか。その母の気持ちを含んで、姉や兄嫁がいくぶん若づくりの旅化粧をほどこしてくれました。父の無念と母の意地を私たちがしかりと受け止めたかどうか、今となっては私たちが自分自身に問うてみるしかありません。しかし、十五年ぶりに再会する母を、父は最大級のねぎらいと感謝、そして賛辞で迎えてくれるはずです」

(たかぎ しんじ・村上市・飲食業)

「田舎料理」の意味

吉田 武雄

わたくしは最近の『教育情報』84号に同封した『研究所通信一〇五号』(〇五年十二月)に會員研究所交流研究会について「歌にも酔った交流会」と題するレポートを書いた。そのなかで、八木三男さんによればとして、村上・松浦家の鮭料理は「京料理のみやびと地元の庶民の鮭料理の間をねらった」ものだといった。それは不正確だ、と八木さんにたしなめられた。

交流会で隣席にいた八木さんはわたくしに、松浦家の先代は「京料理と田舎料理の中間をねらった」といったのだった。あとであらためて聞いた話では、どちらも料理人の料理で、鮭料理とは無関係の抽象概念だという。また

にいがた

北から南から



「みやび」という言葉は使ったことがないとも。言葉にきびしい八木さんは「みやび」という和語は甘ったるい感じで嫌いらしく、絶対に使わない範疇に入るもののようなのだ。

わたくしは十数年前にも鮭料理を完成させた松浦家の先代の話を八木さんから聞いたことがある。それで勝手に庶民の鮭料理をもとに、洗練された鮭のフルコースをつくる物語がわたくしのなかにでき上がっていたのだ。たしかにそういう面はあるだろうが、この場合は、鮭料理に限らない料理一般をいっているのだ。それをわたくしはいわば自分勝手に翻訳したのだった。

このような経験はだれにも少なからずあるに違いない。八木さんの指摘で「田舎料理」が抽象概念であることが分かった。

試みに「田舎」がついた食べ物、『広辞苑』でひいてみたら、「田舎汁粉」「田舎団子」「田舎饅頭」などを例示していた。いずれもつぶしあんを用いているのが共通している。また「田舎づくり」は刺身を厚くつくったものと

ある。ここでいう「田舎」の意味は、見た目は洗練されていないかもしれないが、素材で実質が備わったものということだろう。それに対する語が、優雅で繊細な京風であることは容易に推察できる。

かつて、研究所の市民運動に関連した文書を見た若い人に「ぼくは村に住んでいるが、市民運動でいいのか」と質問されたことがあった。それは社会科学の言葉で、具体的な○市民という意味ではないのだが、わたくしの間違いもそれに似た面があった。

ものを書くことは常に誤りを書いたり、誤解を受ける可能性を内包している。念には念を入れなれないといけない。それは『教育情報』の「校正」にもあてはまる。

皆さんにお知らせしたように『教育情報』84号に乱丁があった。幸い筆者の許しを得られたが、これからの戒めになる。もっと厳密に校正や編集の任に当たっていききたい。

(よしだ たけお・にいがた県民教育研究所員)